



宗祖 法然上人 800回大遠忌

通信



宗祖 法然上人800回大遠忌記念

法然上人と今、すべてのいのち

愛知大会

浄土宗西山禪林寺派 総本山永観堂禪林寺



平成23年4月25日(月)～5月1日(日)

総本山 永観堂禪林寺

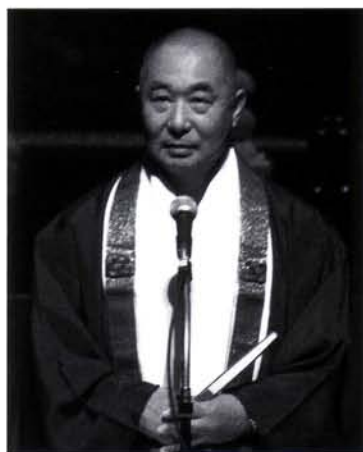


記念大会が開かれた東区の名古屋市芸術創造センター

「一枚起請文」の練習が行われました。大会の趣旨や一枚起請文の解説がなされ、一枚起請文が一節ずつ唱えられ、観客がそれを復唱し、本番前のボイストレーニングとなりました。

待ちに待った大会がいよいよ始まる
愛知大会が開催された名古屋市芸術創造センターは名古屋市中心にあり、ユニークな外観の建物で舞台も広く、文化・芸術を大切にする名古屋市民の誇りと意気込みが感じられ、法然上人800回大遠忌記念事業を展開するにふさわしい会場となりました。
そのホールに、今か今かと期待に胸をふくらませていた愛知県の檀信徒さんがどっと押し寄せ、一階席、二階席をうめつくし六百三十人の入場数となりました。開演に先立ち、名古屋市長 櫻井 賢 氏、近藤玄城師の指導のもと

幕が開き、このホールに永観堂の梵鐘が鳴り響き、舞台中央の六字の名号にスポットライトがあたり、上手に法然上人像が映し出されました。柏木宏之アナウンサーが舞台下手に登場して、開会を告げ愛知大会が始まりました。
この会場こそが法然さまの御遺跡
宗派を代表して久我儼昭宗務総長が次のように挨拶されました。
わたくしどもの宗派、浄土宗西山禅林寺派は法然上人のご遺徳を顕彰し、お念佛の輪をひろめるべく全国で記念大会を開催してきております。
私どもの日暮しはどこにいようと何をしよう、阿弥陀さまとしか呼びよのない大きな御いのちのなかに抱かれているということに気づかせていただかなくてはなりません。
このみ教えをしつかりと受けとめ、生活のなかのお念佛ではなく、お念佛のな



久我儼昭宗務総長の挨拶

かに生活をするという信仰に目覚めさせていただきたいのです。
上人の御弟子が、「法然さまは、いまでもお寺を一つも建てておられません。お亡くなりになったあとは、どこを御遺蹟にしましょうか。」とたずねたとき、法然さまは「念佛の声するところすべてが私の遺蹟なんだ」とお答えなさいました。本日、この念佛にあふれた会場、この会場こそが法然さまの御遺蹟でございます。本日愛知大会に参拝されましたみなさまが、そういう法然さまの心を

しっかりと受け止めていただきましたならば、主催者として幸甚でございます。
最初の法話は、京都市専修寺の住職、岸野亮哲師が「阿弥陀佛の本願」と題して次のようにお話しになりました。
安らぎの道を求めて……
法然上人が浄土宗をお開きになりました。たよりどころとなります。阿弥陀佛の本願についてお話をさせていただきます。
法然上人の説かれたお念佛の教えですが、これは私ども仏教をいただくものとして、目指すところは安らぎの道を求めることであり、日日安らぎの道を歩くということです。法然上人のお口から出たのは、阿弥陀佛の本願にもとづくお念佛をとえ、それが私どもができる安らぎの道である。その思いをつねに念頭において日暮しをすることだとおっしゃっています。

「法然上人と今、すべてのいのち」愛知大会
今にみる法然上人の教えに心うたれ法悦の世界へ！
平成二十二年二月二十七日（水）、名古屋市芸術創造センターにおいて、法然上人800回大遠忌記念「法然上人と今、すべてのいのち」愛知大会が開催されました。愛知県下の六百余人の聴衆は、長い間待ち続けていた大会が実現した歓びと舞台でくりひろげられる法然上人の教えの尊さにふれ、念佛する歓びに浸りました。

それに先立ち、法然上人のご在世についてあらためて考えてみますと、平安時代が終わり、武家の台頭を待つ交代の時期でもありました。そういう時期にあつて、飢饉、疫病、地震が相次ぎ、源氏と平家の戦があつたわけであります。加えて、佛教の末法という時期に入り、人々は必死になつて救いを求めたのです。



専修寺住職の岸野亮哲師の法話

そのようななかで、法然上人は阿弥陀佛の平等の慈悲というものがあつたとおっしゃいました。では、阿弥陀佛の平等の慈悲とはどのようなものか。阿弥陀佛となられたのはもともと法蔵比丘という名前の修行僧です。彼はあらゆる人をわけへだてなく救おう、一切の衆生を救うことができるのではないのなら、わたくしは決して佛にはならないと願をかけて修行、思索をかさねられたのです。そして、おたてになつたその本願というのは、わたくし法蔵が佛となつたときの名を呼ぶもの、そのものを救うことができなかつたら、私は決して佛とはならない。その佛となつたときの名を呼ぶということが阿

弥陀佛という佛様になられたわけですから阿弥陀さんと呼ぶというときに、インドの言葉では「ナムアマミダブツ」というのであります。

法然上人は、ただただナムアマミダブツと阿弥陀さまの名を呼べばいい、それ以外のものは何にも要らない。それゆえに人々は歡びのあまり躍り上つて、法然上人のお念佛の教えに、熱烈に帰依したのであります。

二番目にわたくしたちは、安らぎにいたる道をどのように歩いたらよいか。

わたしたちひとりひとりとは、無力でもできませんけれども、阿弥陀佛に守られた身であると自覚し、そして帰依の心を培い、そのなかで欲望の心をいささかなりとも減らすように努める。そういうことが法然上人の念佛をいただくものとしてわたくしたちが日日心がけることではないかと、思うわけであります。

みなさまよくご存知のように、法然上人の有名な言葉に、「お酒を飲むのはいかでしようか。」と上人に問うたとき、上人は、「ほんとうは飲まんがええ、しかし、世の習いである。」と答えられた。法然上人は、ほんとうはまちがいですが、だけど世の習いだつたら仕方がないでしょう、と認めてくださるのです。どうしようもないわたしたちが悩みをうつたえて、それを素直に聞いてくださる。そのようななかで、法然上人の教えをいただくとするれば、このようなわたくしたちが

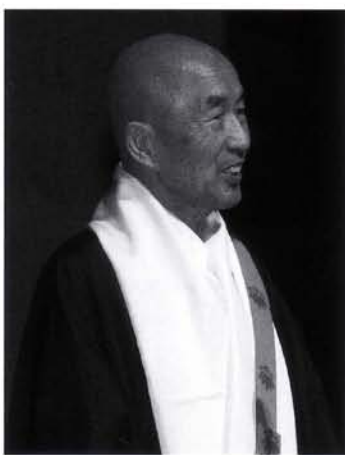
救われる身であるとする自覚できたならば、もったいないことであるなあという思いのもとにいささかなりとも欲望を減らしていくことです。そして、その欲望を減らすことができなかったら、申しわけないという気持ちで、ひたすら、南無阿弥陀佛とお念佛をとなえる。そのとき、わたしたちの心はずっと軽くなつていくと思うんですね。これがやすらぎにいたる道を歩くわたくしたちの務めだと思つておるのであります。

続いて、姫路市大覚寺住職中西玄禮師が「露の身を生きる」と題して、次のようにお話になりました。

感謝の日暮しができるように

こんにちは 兵庫県姫路市の大覚寺の中西と申します。法然上人800回大遠忌の記念法要に、共々ありがたい御法縁に会わせていただいたことを大変嬉しく思っております。

法然上人が七五歳の御年に大きな事件



大覚寺住職中西玄禮師の法話

がありました。法然上人には住蓮、安樂という声のいいお弟子がおられたのです。あるとき、後鳥羽上皇が熊野に参詣された折、そのお留守をしておられる院の御所の女官たちが、法然上人のお念佛の教えをなんとか承りたい、お師匠様が無理であるならば、お弟子の方に来ていただきたい、と。その求めに応じて住蓮と安樂と言う二人のお弟子が院の御所にまねかれて、別時念佛の法要をおつとめになり、お説教もなさつたそうです。すると、お念佛の法要の尊さに、居合わせた女官お二人が、上皇様に無断で出家をしてしまふのです。

熊野から帰られた上皇様がそれをお聞きになられて、烈火のごとく怒られたそうです。で、この住蓮・安樂と言う二人のお弟子は死罪となりました。弟子の罪は師匠の罪であるということで、法然上人は土佐へ島流しとなりました。

いよいよ法然上人が四国へお渡りになる前に、法然上人を心の底から尊敬しておられた九条兼実が、「私の力がおよばなくて、上人を遠い土佐の国にお渡しするのは非常に残念であります。一日も早く罪が許されて京へお歸りになられますように」と言う意味の手紙を書かれたときに、法然上人が歌をひとつお送りになりました。「露の身はここかしこにて消えぬとも心は同じ花のうてなぞ」。たとえこの私が四国の地で果てようとも、あなたがこの京洛の地で往生をお迎えなさる

うともそれはいたし方のないことであります。生老病死は人の世の習い。でもいつか阿弥陀様のお浄土でお会いできるではありませんか。その時の再会を楽しみにいたしましょうね。「露の身はここかしこにて消えぬとも心は同じ花のうてなぞ」非常に愛情の細やかなお歌だなあと、私はこの歌を口ずさむたびに、上人の信心の優しさとお念仏にかけるご信心の深さを思うのであります。(中略)

私の檀家に「はるこ」とさんという八十六歳で亡くなったおばあさんがおられました。パーキンソン病でした。パーキンソン病とはだんだん筋肉が弱ってくる難病なんです。

ある日、机をだしてなにか書いておられるんです。「写経ですか。」と言うと、「とんでもない、広告用紙の裏に鉛筆で書いていてとても写経とよべるものではありません。」と。「そうじゃないんですよ、たとえば広告の裏でも、鉛筆書きでも、今書いているお経の文字の一つ一つに、尊い言われがこめられているんだから、心をこめて一文字一文字写されたら立派な写経じゃないですか。」「そうですか、それを聞いて安心しました。これが写経ならこれからは心をこめて一所懸命書かせていただきます。」と大変喜ばれました。



勤行式による記念特別法要

それから一年ほどして入院されて、結局亡くなられました。枕経に訪れてお経をあげていると枕もとの箱が目にはいりました。息子さんに断つて見せてもらいますと、唱歌の歌詞とか新聞の詩であるとかが書いてありました。中に一枚まったく種類の違う文章が目につきました。こう書いてありました。「仏様からお預かりしたこの両手、とつても便利に使わせていただきました。でも、震えたり痺れたり、思うように動かなくなりました。どうやらお返しのときが来たようですね。でも良い手ありがとうございました。南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏・・・」私は涙がこぼれそうになりました。息

子さんに「お母さんこんな言葉を書いていらつしゃいますよ。」と言うと、息子さんも涙を流しながら「母がこんな思いで一日一日を過ごしていきたくれようとは思いませんでした。難病にかかって辛いだろう、苦しいだろうとは思っていても、子供として出来ることには限界がある。きつと母は私たちをどうしてこの悲しみを分かってくれないの、と恨んでいるだろうと思っていました。この手紙を読んで救われた思いがします。母はたとえ足が動かなくてもまだ手が動く、耳が聞こえる、目が見える、ご飯が食べられる。残されたそのことに大きな喜びを感じていたのです。これは母が私たちに書き残してくれた遺言だと思っています。大事にしようと思います。」今でも佛壇の横にこの紙が額に入って飾ってあります。たとえ難病といわれる病の床にあっても、生かされている恩を喜び、南無阿弥陀仏と唱えることに感動しながら有難うございましたと感謝の日暮らしができる。それが本当の念佛の三感王であろうと思います。感動、感謝、感恩、お念佛の三感王になりましょうね。たとえ露の身のはかない命であっても最後にはきらつと朝露に光って佛様のお浄土に帰りましょう。それではご一緒にお念佛を唱えましょう。

心ひとつに南無阿弥陀仏の世界へ

次に浄土宗西山禅林寺派管長総本山永観堂禅林寺法主小木曾善龍猊下が主宰する、法事部による記念法要が厳かに営まれました。舞台中央の法主を囲むように、左右に式衆がハの字型に並び、「勤行式」による読経を見事な調子とハーモニーで唱え、列席されている愛知県檀信徒さんに新たな感動を与えていました。会場が満ち溢れ、記念大会は最高潮に達しました。



小木曾善龍猊下の御親教

御親教



小木曾善龍管長
は次のようにの
べられました。

ご一同様、本日は愛知県の各地方からお参りをいただきまして有難うございます。お念佛は西方極樂世界の阿弥陀様のお呼び声であります。阿弥陀様はよそ見するんでない、南無阿弥陀佛白道一筋にこいよとおっしゃられておる。お釈迦様は涅槃の間際におきましてご遺言されていた。「この世と言うものは、いつ無常の風が吹くかも分からない。最後の最後まで心清らかに精進するがよい」と。心清らかに精進せよということとは、南無阿弥陀佛、阿弥陀様の大悲をよく信仰して精進せよと言うことです。それぞれの仕事に励めよといったご遺言であつたわけです。

みなさん、この世での最後の目的は美しい香りの良い花を咲かせることなんです。この世で咲かせました花をば、阿弥陀様がいい花を咲かせたよしよし、と収穫し抱きかかえてくださるのです。

みなさん、無常の風はいつ吹くかわかりません。どうぞ最後の目的は念佛一筋に迷いのない美しい花を咲かせて阿弥陀様にお迎えを頂きたいと思っております。

舞台と観客とが一体となる

第二部は、古屋和子さんの琵琶で語る「法然上人物語」。琵琶をばちで弾く音にあわせ古屋さんの声が響く。「へ祇園精舎の鐘の聲 諸行無情の響きありへ、総てはうつろい行く、総てのものは滅ぶという無常感を人々は現実として感じるようになっていた。」で始まり、勢至丸の誕生から、父漆間時国と明石定明との確執、父の臨終と遺言、母と別れ比叡山へ、比叡山での勉強と心の葛藤、観経疏との出会い、そして法然上人四十三歳、



琵琶で語る古屋和子さん

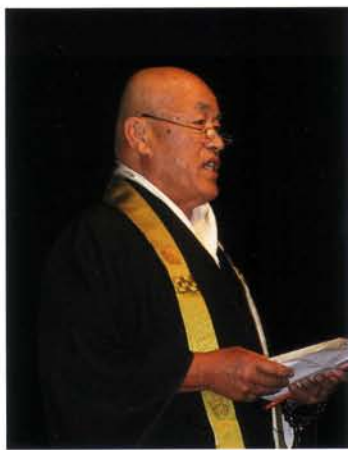
「ただ南無阿弥陀佛とお唱えなされ。阿弥陀さまは修行もいらぬ、喜捨もいらぬ。ただただ一心に念佛を唱えよと仰せられた。阿弥陀さまは総ての衆生愚痴の凡夫を救うと誓いを立てて下されたのだ。心から阿弥陀さまにおすがりなされ。阿弥陀さまは必ず浄土へと導いてくださる。総てをお任せして、ただ一心に南無阿弥陀佛と唱えればよいのだ。ただ南無阿弥陀佛と。」それを聞いた観客の一人が立ち上がり、南無阿弥陀佛、と。またひとり立ち上がり南無阿弥陀佛、と。つぎつぎと立ち上がり十念となる。そして古屋さんの声が重なるように「専修念仏は燎原の火のように燃え広がった。」とつづき、舞台と観客とが一体となって、南無阿弥陀佛の世界へ導き、最後、入滅の場面「それから二日後の建暦二年正月二十五日、法然上人は入滅した。」というところで、十人が同時に立ち上がり、十念を唱えました。このように、舞台と観客とが一体となって、この法然上人物語を盛りあげ、成功へと導きました。

満場の拍手がなりやまぬうちに、古屋さんが「みなさん全員で一枚起請文をとなえましょう」と提案し一節一節かみしめるように大きな声でとなえ、最後に、全文を会場全員で唱和。法然上人の大会をご遺訓で締めくくりました。

この感激を大遠忌祥当まで

最後に、浄土宗西山禅林寺派愛知県宗務支所長、長善寺住職丹羽万堂師が、次のように閉会の辞を述べられました。

本日は宗祖法然上人800回大遠忌記念の「法然上人と今、すべてのいのち」愛知大会に、こんなにもたくさんの方が集まっていたいただき本当にありがとうございます。



閉会の辞 愛知県宗務支所長 丹羽万堂師

今私は、みなさまの先程のお念佛の声と一枚起請文の唱和の声に心より感動しました。その感激を一人でも多くの人に体験していただくために、来る平成二十三年四月に本山で開催される「法然上人800回大遠忌」にはみなさまのお力添えで、もっと多くの人を誘っていただき、さらに大きなお念佛の声と感動とともに味わうことが出来たらなあと思っております。



宗祖法然上人800回大遠忌記念事業

「宗祖法然上人800回大遠忌」記念事業最高潮に！

京都大会を成功させて遠忌へ！

比叡山へ近づく法然上人を歩く旅

第四回法然上人への絵手紙募集

「一枚起請文」の写経を広めよう！

宗祖法然上人800回大遠忌記念「法然上人と今、すべてのいのち」京都大会は、今年十月十三日（水）京都テルサホールで開催されます。これまで各地で多くの檀信徒に感動をあたえたあのドラマを京都に持ち込み、京都府、滋賀県、奈良県、大阪府などの禅林寺派の檀信徒を対象に届けたいと願っています。細部はまだ決まっていますが、大枠はこれまでの大会を踏襲するものと思われ、想定される展開は、永観堂の梵鐘を合図に司会者が登場し、開会を告げると記念大会が始まります。まず、宗務総長の挨拶で口火が切られると、十五分の法話を二席聞いていただきます。つぎに管長祝下と法事部による特別法要を厳修いたします。続いて管長祝下の御親教があり、第一部を終わります。

十五分の休憩後、第二部が始まります。第二部は、古屋和子さんの琵琶で奏でる「法然上人物語」です。四十五分間たつぷりと法然上人の一代記を語っていただきます。語り終えれば、会場全体で「一枚起請文」を合唱。最後に、京都府宗務支所長の閉会の挨拶で幕を閉じます。

これまでに開かれた大会
平成十九年三月九日（金） 高砂市福祉健康センター
兵庫県下の檀信徒410名
平成十九年十月四日（木） 東京増上寺
円光寺を中心に
首都圏の檀信徒480名
平成二十年十月三日（金） 羽島市文化センター
岐阜県下の檀信徒430名
名古屋芸術創造センター
愛知県下の檀信徒630名
平成二十二年三月七日（水）

二〇〇六年十月九日、岡山誕生寺を出発して、二〇〇九年十二月十三日現在、高槻まで、二百三十・二キロをすでに踏破しました。
第十三回は三月七日（日）高槻から桂川（久世）まで十八・〇キロを歩きます。
いよいよ京都に入り、法然上人の旅も最終に近づいてきました。

第十四回は、桂川（久世）から修学院まで。そして第十五回は修学院から比叡山に登り、延暦寺に到着します。

第一回 平成十八年十月九日 誕生寺・津山 十六・五キロ
第二回 平成十八年 十二月三日 津山・林野 十七・〇キロ
第三回 平成十九年三月十日 林野・美作土居 十五・〇キロ
第四回 平成十九年五月十三日 美作土居・比叡山 十八・〇キロ
第五回 平成十九年九月三十日 比叡山・千本 十六・〇キロ
第六回 平成十九年十二月九日 千本・本電野 十六・五キロ
第七回 平成二十年三月九日 本電野・総路 十九・〇キロ
第八回 平成二十年五月十一日 総路・東加古川 二十・〇キロ
第九回 平成二十年十二月十四日 東加古川・舞子 二十二・七キロ
第十回 平成二十一年三月八日 舞子・六甲道 二十三・五キロ
第十一回 平成二十一年九月二十七日 六甲道・北伊丹 二十一・九キロ
第十二回 平成二十一年十一月十三日 北伊丹・高槻 二十一・一キロ
第十三回 平成二十二年三月七日 高槻・桂川（久世）
第十四回 平成二十二年五月十六日 桂川・修学院予定
第十五回 平成二十二年十月三日 修学院・比叡山予定



「法然上人と今、すべてのいのち」をテーマに、第四回の法然上人への絵手紙を募集します。昨年も素晴らしい作品がたくさん寄せられましたが、今年も、あなたの力作を法然さまに届けてください。自分の望み、願い、悩み、主張：なんでも結構です。絵手紙にして送ってください。

はがき大に絵手紙を描き、封書で郵送してください。彩色、画材自由、絵に一言添えてください。

〒住所、氏名（振り仮名）、電話・FAX番号、年齢、性別を明記。なお、応募点数に制限はありません。

賞 最優秀賞（一本）硯
優秀賞（三本）墨

佳作 作（十本）筆

締切 平成二十二年十二月三十一日
発表 翌年二月 入選者に通知。

応募先 総本山永観堂禅林寺

「法然上人800回大遠忌」事務局

第3回 入賞作品一例



※応募作品の著作権は、主催者に帰属します。

法然上人の遺訓ともいえる「一枚起請文」。口称念佛こそ、本願の念佛にほかならぬことを述べ、また無知なものと同じように、自身を一文不知の愚鈍の身におとし、専ら念佛すべきことを説いています。短い文章ですが、専修念佛の要旨が簡潔に説かれています。この短い文章を一字ずつ写し取って、その精神を心に刻むように写経運動を展開しています。

お子さんでも写経できるように、平かな文のお手本もあり、なぞるだけで写経できる家族みんなで楽しめる写経セットです。回向料も含めて一部千円です。ぜひ、この機会に檀家さんにお勧めください。

写経して本山へ納めていただければ、すべて回向して御影堂の納経所に一年間祀られます。

発行所

宗祖法然上人800回大遠忌記念事業事務局

〒六〇六・八四四五 京都市左京区永観堂町四八

電話 〇七五・七六一・〇〇〇七

FAX 〇七五・七七・一四二四三

Eメール zenrinji@elkando.or.jp

二〇一〇年三月一日発行